

平成 28 年 1 月 13 日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 島根県教育委員会

所 在 地 島根県松江市殿町 1 番地

代表者職氏名 教育長 藤原孝行

平成 27 年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成 28 年 3 月 31 日

2. 強化地域拠点の学校名

ふりがな	しまねけんりつみとやこうとうがっこう	ふりがな	おんだ よしお
学校名	島根県立三刀屋高等学校	校長名	恩 田 佳 雄
ふりがな	うんなんしりつよしだちゅうがっこう	ふりがな	かつべ ゆきお
学校名	雲南市立吉田中学校	校長名	勝 部 由 紀 夫
ふりがな	うんなんしりつよしだしょうがっこう	ふりがな	かった ひろし
学校名	雲南市立吉田小学校	校長名	勝 田 寛
ふりがな	うんなんしりつたいしょうがっこう	ふりがな	ふじはら まさし
学校名	雲南市立田井小学校	校長名	藤 原 政 司

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

- 複式学級における外国語活動及び英語科の教育課程、指導方法、評価方法並びに教員研修の在り方。
- 小学校英語科と円滑に接続し、小規模学級の特色を生かして着実な定着を図る中・高等学校の教育課程等の在り方。

(2) 研究の概要

文部科学省の調査によれば、平成 22 年度の全国の小学校における複式学級は 5,804 学級（児童数 47,285 人）にのぼる。本県においては全小学校の約 3 分の 1 の学校が複式学級を有しており、複式学級における指導方法等の研究は重要な課題となっている。現在、複式学級における外国語活動では、2 ヶ年の指導単元の組替え等によって対応しているが、他の教科等ほど指導方法が確立されていない状況である。英語教育の早期化に伴い、初めて英語と出会う学年が小学校第

3 学年になること、高学年の教科化により小学校修了時に求められる英語力を保障する必要があること等を勘案すると、複式学級における英語指導はこれまで以上に大きな課題となることが予想される。これらのことから、本研究では、異学年の児童が同時に存在する少人数の学級においても、コミュニケーション能力の素地や初歩的な英語力を養うことができる複式学級の教育課程や指導方法等の開発に取り組む。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

[1] 学校・地域の現状や課題

本拠点の小学校 2 校はいずれも全校児童 30 名前後の小規模校で、第 3・4 学年及び第 5・6 学年はともに複式学級である。5 年生と 6 年生がそれぞれ数人しかおらず、言語活動を中心に進める外国語活動においては、一人の担任による学年別指導は困難である。使用教材の 2 ヶ年の単元を組み替えながら、5・6 年生が一緒に行える学習活動を工夫しているものの、年間指導計画の作成は大きな課題となっている。

小規模であることから、授業では児童一人一人が英語を口にする機会は多く、ほとんどの児童が活動に対して積極的に取り組む。担任も一人一人の活動状況を見取りやすく、きめ細かな指導が可能である。しかし、人間関係が限られていることから、児童相互の新たな発見や気付きを促す相手意識のあるコミュニケーション活動の設定が難しく、コミュニケーション能力の素地を養ううえで重要な「人との関わりへの興味・関心・意欲」の向上につながりにくい面がある。

教員間の関係は小規模校ならではの強さがあり、全教職員で児童を育てようとする気運が高い。その結束力は自校内にとどまらず、本拠点の小学校 2 校が連携を図り、両校の教員による合同学習等も頻繁に行われている。また、小・中・高等学校の連携も密である。本拠点の研究校は、学校教育に対する関心や理解の高い地域にあり、学校参観等における保護者の参加率は、両小学校ともにほぼ 100% である。雲南市が掲げる「ふるさとを愛し、心豊かでたくましく、未来を切り拓く、雲南市の人づくり」という教育基本目標のもと、学校・保護者・地域・教育委員会が一丸となっており、地域住民も「支援ボランティア」として日常的に学校教育に関わるなど、学校教育への協力が得やすい環境にある。

雲南市教育委員会は、教育基本目標実現の施策として独自のキャリア教育推進プログラムを策定しているが、未来を切り拓く児童生徒の育成のために、グローバル社会に対応する力の育成を重視し、ふるさとの良さを世界に発信する「さくら英語スピーチコンテスト」を小中学生を対象に開催するなど、英語教育には特に力を注いでいる。

[2] 平成 26 年度の取組と研究成果等

こうした現状や課題に対し、平成 26 年度は次のような取組を行った。4 ヶ年計画の第 1 年次であったこともあり、研究を推進していくうえでの基盤づくりに重点的に取り組んだ。

○4 ヶ年の研究開発推進のための基盤づくり

- ・組織づくり（吉田中学校区小・中・高等学校英語教育強化推進研究会）

○環境整備

- ・教室環境の整備
- ・指導用教材の選定、作成の準備

- ・先進的な取組の情報収集
- カリキュラム開発の準備
 - ・目標と内容の設定（有識者会議で提案された目標、内容を原案とした）
 - ・教育課程の編成についての検討
 - ・評価についての検討
- 英語コーディネータの役割設定
 - ・「専科」の名称をやめ「英語コーディネータ」とする
 - ・「フェイドアウト型連携」の工夫
- 授業研究及び教職員研修計画
 - ・外部講師による研修の設定
 - ・授業公開等による研究協議
 - ・校内研修
- 小・中・高等学校連携の基盤づくり
 - ・小学校から高等学校までを俯瞰する学習到達目標を設定するための方法等の検討
 - ・小・中・高等学校をつなげる指導案フォーマットの作成とそれによる授業研究
 - ・中学校では言語活動を中心とした授業の実施
 - ・中・高等学校でそれまでに作成していた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の見直しと修正
- 英語学習のモチベーションを向上させる取組
 - ・各種英語スピーチコンテストの活用
 - ・ICTの活用

これらの取組を通して得た成果と課題は次のようなものである。

<成果>

- ・小学校中学年、高学年ともに英語を聞く力が大幅に向上した。
- ・すべての学年で英語学習への関心・意欲が高まった。
- ・英語を使って話そうとする意欲、コミュニケーションに対する関心・意欲が高まり、他校の児童や外部の人との関わりへの積極性が生まれた。
- ・英語教育コーディネータと担任の授業への関わり方、役割分担がはっきりし、授業づくりのための連携が進んだ。
- ・複式学級のための単元配列表が完成し、次年度からの具体的な取組の基盤ができた。
- ・様々な研修会や研究会を通し、小学校教職員のチーム力・組織力、外国語活動の授業研究に対する意欲が高まった。
- ・中学校においても言語活動を重視した授業改善が進んだ。
- ・中・高等学校において、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づいた単元計画の考え方が浸透してきた。
- ・地域の英語スピーチコンテスト等に積極的に参加する児童生徒が増えた。

<課題>

- ・英語を使った活動はできているが、聞いた英文等の英単語が1つでも分からないと、「英語は分からない」と判断してしまい、英語に対する苦手意識を高めた児童が、わずかながら出てきた。そうした児童は、コミュニケーションを図ったり、英語を通して自分が知らない情

報や話題を知ったりすることへの意欲や関心、喜びより、単語や文章が完全に理解できることに英語学習の価値を置いてしまっていると考えられる。「全部は分からないけど、何とか意味が分かった」という「曖昧性への忍耐力」を身に付けるための活動や指導が、一方で、そうした児童にとってストレスの高いものになっていた。

- ・小学校中学年、高学年の外国語教育に係る目標及び内容の設定をしたが、有識者会議で提案されたものを案として掲げており、内容の検討までに至らなかった。これらを定めていくよりどころになる情報が少ないため、運営指導委員の大学教授等の指導等を受けながら、次年度は確定していく必要がある。また、小学校において、複式学級のための単元配列表は作成したが、各単元の計画は完成しておらず、平成 27 年度に授業を進めながら研究していく必要がある。
- ・中学校、高等学校での研究が十分進んでいない。「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を定め、小・中・高等学校それぞれの到達目標を明確にしていく必要がある。それに基づいた単元計画、授業改善を図っていく必要があるが、今年度は検討にとどまり、具体的な到達目標の設定ができていない。
- ・平成 28 年度に、小学校で教科としての英語を学んだ小学生が入学してくることになるが、それまでに中学校の英語スタートプログラムを策定する必要がある。
- ・平成 26 年度が準備期間であったこともあり、高等学校の教育課程についてはまだ具体的なものがない。中・高等学校の教員がチームとして「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の策定に関わりながら、高等学校の指導の現状や課題についてしっかりとした分析を行い、教育課程の方向性を示していく必要がある。
- ・研究成果の検証のために当初予定していた調査等が十分に成されなかった。英語検定以外にもアンケート等による定量的検証のための方法を明確にし、計画的に実施していく必要がある。

[3] 研究の目的

平成 26 年度の研究目標や具体目標を継承しながら、これまでの成果と課題を踏まえ、次のような研究目標を掲げることとした。

「ふるさとを愛し、その良さを広く世界に発信しようとする意欲とコミュニケーション能力の基礎を身に付け、グローバル社会に向けて自らの生き方を切り拓いていこうとする心情や態度を養う英語教育の在り方を探る」 ～複式学級及び小規模校での実践を中心に～

○具体目標

- I 複式学級における第 3・4 学年の外国語活動及び第 5・6 学年の英語科について、適切な教育課程や指導方法等を明らかにする。
 - 各学年の具体的な教育課程と年間指導計画、単元計画の設定
 - 教材、言語活動を明確にした、複式学級における各単元の計画の策定
 - 「曖昧性への忍耐力」と「スキルの定着」のバランスを考えた、学習意欲を低下させない指導方法の研究
 - 教科として取り組む高学年の英語科の評価方法の設定
 - 評価に生かす「イングリッシュパスポート」の作成
- II 地域の教育力と小規模校の良さを生かした英語教育を推進する。
 - 小・中・高等学校をつなげる「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定

○小・中学校の英語による言語活動をつなげる地域素材教材の作成

○小・中・高等学校の教員交流、授業交流等の推進

②研究仮説

上記研究目標に対し、それぞれ次のような取組を計画し研究を推進することで目標が達成できると捉え、その実現を目指すこととした。

I 複式学級における第3・4学年の外国語活動及び第5・6学年の英語科について

○各学年の具体的な教育課程と年間指導計画の設定

- ・小学校中学年では、コミュニケーション活動に固執することなく、歌遊びや言葉遊び、ゲーム、絵本等の教材による自己完結型の体験や活動を数多く設定する。
- ・小学校高学年では、文字を書くことや読むことへの関心の高まりを把握しながら、書いたり読んだりする態度を育成できるよう、言語活動と書くこと読むことを結びつけて扱う。
- ・学習活動において下学年と上学年の役割分担を設定し、上学年が2年目の成長を確認できる活動を設定する。
- ・教育課程の編成にあたっては、特別支援教育の視点を大切にし、児童の「困り感」に寄り添うことができる支援方法、配慮事項等についても検討する。

○教材、言語活動を明確にした、複式学級における各単元の計画

- ・作成した単元配列表に基づき授業を実施し、検証・修正を行う。
- ・教材、単元目標、指導の流れ、評価等を明記した単元計画を作成し、蓄積する。
- ・教材は「Hi, friends!」、文部科学省の補助教材及び島根大学教育学部附属小学校の教材を活用する。

○「曖昧性への忍耐力」と「スキルの定着」のバランスを考えた、学習意欲を低下させない指導方法の研究

- ・他校の児童や地域の人材、海外の人々等との交流を活用した言語活動を取り入れ、コミュニケーションを図ることの楽しさや喜びを実感できる相手意識のある言語活動を設定する。
- ・調査等によって把握した児童個々の英語学習への思いや傾向を授業づくりに生かす。
- ・意欲を下げない評価方法や児童への言葉がけについて研究する。

○教科として取り組む高学年の英語科の評価方法の設定

- ・「書くことや読むことへの態度」を評価する評価規準を設定する。
- ・高学年～中学校においては、「話すこと」を「発表」と「やりとり」に分けて評価規準を設定する。
- ・パフォーマンステストの具体的な実施方法について明確にする。
- ・通知表や学習指導要録へ記載する評価文について検討する。

○評価に生かす「イングリッシュパスポート」の作成

- ・小・中・高等学校をつなげる「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標に基づき、小学校の学習事項を自己評価できる手帳型の「イングリッシュパスポート」の開発に取りかかる。（完成は次年度以降）

II 地域の教育力と小規模校の良さを生かした英語教育を推進する。

○小・中・高等学校をつなげる「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定

- ・小学校3年生～高等学校3年生までの「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を策定する。
- ・小学校から高等学校までの言語材料や言語の使用場面を一覧化し、それを配列し直しながら、なだらかな流れで円滑に接続する。
- 小・中学校の英語による言語活動をつなげる地域素材教材の作成
 - ・地域の伝統や文化、歴史と関連させて、地域の良さを発信する活動を取り入れるとともに、ALTによる教材化を図る。
 - ・平成27年度中に製本し、平成28年度から使用する。
- 小・中・高等学校の教員交流、授業交流等の推進
 - ・兼務の小学校教員を中心に、小・中・高等学校間での授業交流の回数を増やす。
 - ・中学校と高等学校の授業交流を頻繁に行い、英語教育に対する教育観を統一する。
 - ・「外部専門機関と連携した英語教員授業力向上事業」と連携し、中学校を研修協力校として、小・中・高等学校を対象にした外部専門機関による研修を実施するとともに、県内各地から参加する教員に対して、雲南での取組を普及する。

③研究成果の評価方法

次の評価資料を収集・分析して、研究成果を検証し、改善につなげる。検証方法については年度始めに協議し、具体的な計画を立てることとする。

- 児童生徒への意識調査の定量的分析
- 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
- 運営指導委員による評価
- 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
- スピーチコンテスト、国際交流事業への参加状況

(4) 研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第3・4学年 1コマ 第5・6学年 1コマ	第3・4学年 1コマ	第3・4学年 2コマ (内モジュール1も 検討)	第3・4学年 2コマ (内モジュール1 も検討)
②小学校 教科型	第5・6学年 0コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 2コマ	第5・6学年 3コマ (内モジュール1 も検討)

(5) 研究計画

○第一年次～第四年次、校種別

<第1年次(平成26年度実施済)>

1 全体計画

(1) 組織整備

○校内及び拠点地域の組織整備

- ・吉田中学校区小・中・高等学校英語教育強化推進研究会の設置
- ・上記研究会に、授業研究部・教材研究部・小中高地域連携部及びALT研究部を置き、正副会長会、部長会、総会、部会を実施し、後述の計画に取り組む。

(2) 環境整備【教材研究部】

○教室環境整備

- ・英語ルーム等の整備（掲示物、辞書、英語絵本、音声教材等）

○指導用教材の選定、作成

- ・市販教材の研究
- ・「Hi, friends!」の活用方法研究
- ・地域素材を取り入れたオリジナル教材の作成計画（平成27年度中に作成）

(3) 先進的な取組の情報収集【主として授業研究部】

○先進地視察

- ・香川県直島町立直島小学校、徳島県鳴門市立林崎小学校を視察
- ・全国小学校英語教育実践研究会神奈川大会への参加
- ・教育課程、年間指導計画、指導教材等の収集
- ・視察結果伝達講習会の実施

(4) カリキュラム開発【主として授業研究部】

○教育課程の編成

- ・平成27年度より、小学校第5・6学年までの週あたりの授業時数を1時間増やし、中学年の外国語活動、高学年の英語の授業時数を設定

○指導計画の策定

- ・「Hi, friends!」の単元の組み換え、再構成
- ・有識者会議の提言に基づいた目標、内容の策定
- ・単元配列を組み替えた複式学級用年間指導計画の策定
- ・振り返りカードの作成、評価方法の研究
- ・児童英検等、外部検定試験の計画、活用研修

○授業研究計画

- ・年間の研究授業等スケジュール作成

○教職員研修の計画

- ・小学校教員を対象とした研修の実施

(5) 小・中・高等学校連携の基盤づくり【小中高地域連携部】

○小・中・高等学校10ヵ年間で俯瞰する学習到達目標の研究

- ・小・中・高等学校がつながる「雲南市『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標」についての研究

○小・中・高等学校をつなげる指導案フォーマットの作成

- ・小・中・高等学校のつながりを明記した指導案作成

○小・中・高等学校交流の計画

- ・授業交流、授業研究会の実施

- (6) 英語学習のモチベーションを向上させる環境整備【主として小中高地域連携部】
- 「さくら小中学生英語スピーチコンテスト」等各種英語スピーチコンテストの活用
 - ・小中学校の英語科年間指導計画への位置付け
 - ICT環境整備
 - ・諸外国との交流等を実現するためのICT環境の整備
 - 地域教材の整備
 - ・英語による発信の素材となる地域教材等の作成計画
 - 国際理解の取組の推進
 - ・ALT、CIRによる情報提供
 - ・授業における米国インディアナ州リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流
- (7) 研究成果普及のための基盤づくり
- 英語教育推進リーダーを活用した研修計画の策定
 - ・次年度以降の計画も含めた長期的な普及計画を策定

2 小学校

(1) 第3・4学年

- 週1コマの設定で外国語活動を開始
 - ・Hi, friends! 1の前半の単元を中心に、学習活動を計画
 - ・島根大学教育学部附属小学校及び広島大学附属小学校の教材を参考
 - ・教職員研修を実施
- 次年度に向けた年間35時間設定の年間指導計画
 - ・独自の複式学級用単元配列表を作成
- 指導教材の開発
 - ・地域教材の作成を計画
- 小小連携の推進
 - ・合同学習の実施
 - ・授業研修や情報交換

(2) 第5・6学年

- 学習指導要領に従って外国語活動を実施
 - ・初年度は教科化に向けての準備とし、これまでの外国語活動を実施
- 次年度の教科化へ向けた新教育課程の開発
 - ・目標や指導内容の検討
 - ・年間指導計画、評価規準の作成
 - ・教材等の検討
 - ・文字の扱い方等、教科型の教育課程に向けた指導方法の研究
- 小小連携の推進
 - ・合同学習の実施
 - ・授業研修や情報交換

3 中学校、高等学校

(1) 中学校

- 小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動の授業を知る
 - ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び次年度の指導方針の策定の支援
- 中学校英語教育の高度化を目指した指導改善の計画
- ・英語による授業の推進
 - ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の作成
 - ・中1スタートプログラムの検討

(2) 高等学校

- 小中高英語授業交流を実施
- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動の授業を知る
 - ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び次年度の指導方針の策定の支援
- 中学校の学習到達目標との連結
- ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の作成

< 第2年次（平成27年度） >

1 全体計画

(1) 研究組織による主体的な研究の推進

①計画に沿った定期的な総会、部会等の実施

- ・正副会長会により研究の方向付けを図る
- ・部長会により研究の計画立案と状況把握を行う
- ・総会により全教職員で情報の共有化を図る
- ・部会により各研究部の取組を推進する

②授業研究部

- ・共通の指導案様式を使った小中高等学校合同での授業研究を実施する
- ・中学校、高等学校のチーム化による授業研究の活性化を図る
- ・作成した単元配列、年間指導計画等について授業研究を基に検証する
- ・絵本の活用方法について検討する
- ・授業における ICT の活用方法について研究する
- ・中学校における学習の高度化について、単元等の原案を作成する
- ・先進校視察を計画、実施する

③教材研究部

- ・言語活動に活用する地域素材を取り入れたオリジナル教材を、ALT らと連携しながら作成する
- ・平成27年度2学期末までに原稿を完成する
- ・平成27年度3学期に印刷、製本し完成する
- ・平成28年度から小学校及び中学校で使用する

④小中高地域連携部

- ・小学校～高等学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を作成する
- ・雲南市の英語教育に関するイベントや交流事業を、児童生徒の外国語学習への動機づけに活用する
- ・効果的な研修方法を検討し、外国語教育に係る研修を実施する

⑤ALT 研究部

- ・民間の ALT と JET の ALT の役割分担を明確にする
- ・絵本等の教材の提供を行う
- ・学級担任との効果的なチームティーチングの方法、指導案の様式等について提言する

(2) 小中高等学校の連携の強化

- ・定期的に小中高等学校合同で授業研究、研修会を実施する
- ・外国語担当が1名である中学校での研究を活性化するため、中学校・高等学校での研修や検討・情報交換のための会を、定期的に合同で実施する

(3) 研究成果の公表、普及

- ・本研究の取組状況を公表するウェブサイトを構築する
- ・英語教育推進リーダーによる域内研修において、研究校の取組について情報提供する機会を設ける

(4) 外国語学習へのモチベーションの向上

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテスト等への積極的な参加を促す
- ・地域イベントや国際交流事業等を授業に結びつける
- ・ICTを活用した外国の児童との交流校の選定、連絡調整と試行を行う

2 小学校

(1) 第3・4学年

①教育課程の編成

- ・教育課程内の教育活動として、週1時間の外国語活動を実施する
- ・学習指導要録の様式を変更し、記載項目を設けて記録する

②指導形態

- ・担任による指導を基本とし、英語コーディネータがフェイドアウト型の連携を行う

③使用教材

- ・1種類の教材のみを使用する形式ではなく、「Hi, friends!」や参考資料を基に、単元ごとに教材を再構成し、オリジナルの単元を作成する
- ・その際、島根大学教育学部附属小学校の教材及び教科書会社等が作成している市販の教材を一部活用する
- ・作成した教材は蓄積、記録し、電子データ化して次年度以降活用する

④評価

- ・評価の観点及び評価規準を定め、記述による評価を行う
- ・複式学級における異学年の児童の評価方法について検討する

(2) 第5・6学年

①教育課程の編成

- ・週時数を1時間増やし、教育課程内の教育活動として、週2時間の「英語」を実施する
- ・学習指導要録の様式を変更し、記載項目を設けて記録する

②指導形態

- ・担任による指導を基本とし、英語コーディネータがフェイドアウト型の連携を行う
- ・英語コーディネータは評価の中心となる

③使用教材

- ・ 1種類の教材のみを使用する形式ではなく、「Hi, friends!」や参考資料を基に、単元ごとに教材を再構成し、オリジナルの単元を作成する
- ・ その際、文部科学省の補助教材及び教科書会社等が作成している市販の教材を活用する
- ・ 作成した教材は蓄積、記録し、電子データ化して次年度以降活用する

④評価

- ・ 評価の観点及び評価規準を定め、主として記述による評価を行う
- ・ ポートフォリオ及びパフォーマンステストを活用し、英語学習への意欲が高まることを第一義とした評価を実施し、スキルのみでの評価にならないよう配慮する
- ・ 複式学級における異学年の児童の評価方法について検討する

3 中学校、高等学校

(1) 中学校

① 小中高英語授業交流を実施

- ・ 中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を定期的実施する
- ・ 小学校英語教育担当教員との情報交換を計画的に実施し、それを基に年間指導計画等を検証、修正する
- ・ 特に中学校と高等学校の連携を強化する

② 中学校英語教育の高度化を目指した指導改善の計画

- ・ 英語による授業を推進する
- ・ 言語活動の充実を図る
- ・ 小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を完成する
- ・ 中1スタートプログラムの計画及び次年度へ向けた授業の高度化の計画を行う

③ モチベーション向上の取組を推進

- ・ さくら小中学生英語スピーチコンテストへの積極的な参加を促す
- ・ ICTを活用した外国の児童との交流校の選定、連絡調整と試行を行う
- ・ 米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

(2) 高等学校

① 小中高英語授業交流を実施

- ・ 中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を定期的実施する
- ・ 小学校英語教育担当教員との情報交換を計画的に実施し、それを基に年間指導計画等を検証、修正する
- ・ 特に中学校と高等学校の連携を強化する

② 中学校の学習到達目標との連結

- ・ 中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を完成する

③ モチベーション向上の取組を推進

- ・ 中・高等学校連携授業を計画し実施する
- ・ ICTを活用した外国の生徒との交流校の選定、連絡調整と試行を行う

- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

< 第3年次（平成28年度） >

1 小学校

(1) 第3・4学年

○計週2コマの外国語活動を実施

- ・週2コマのうち1コマは、モジュールによる時間設定も検討する
- ・平成27年度に蓄積した教材を使った担任による指導を行う
- ・小小連携による合同学習での言語活動を実施する
- ・教職員研修を実施する

(2) 第5・6学年

○週2コマの英語科を実施

- ・平成27年度に蓄積した教材を使った担任による指導を行う
- ・英語コーディネータによる評価方法を確立する
- ・小小連携による合同学習等で言語活動の充実に努める
- ・評価方法について検証、修正する
- ・教職員研修を充実させる

○次年度に向けたカリキュラムの策定

- ・週3時間の指導計画を検討、策定する。その際、モジュールの形態についても検討する

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへ参加する
- ・ICTを活用した外国の児童との交流等を実施する
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ英語学習への興味関心を高める

2 中学校、高等学校

(1) 中学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を行う
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証を行う

○中学校英語教育の高度化を目指した指導改善の計画

- ・英語による授業を完全実施する
- ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の検証と年間指導計画の再編成を行う
- ・高度化された中1スタートプログラムを実施し検証する
- ・オリジナル教材等を使った高度な英語授業を研究する

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへ参加する
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流を実施する

- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

(2) 高等学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を行う
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換及び年間指導計画の検証を実施する

○高度化した中学校の学習到達目標との連結

- ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を検証、修正する
- ・高1スタートプログラムを計画する

○モチベーション向上の取組を推進

- ・中・高等学校連携授業を計画、実施する
- ・ICTを活用した外国の生徒との交流を実施する
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

<第4年次(平成29年度)>

1 小学校

(1) 第3・4学年

○計週2コマの外国語活動を実施

- ・モジュールについては平成28年度検討結果による
- ・前年度までに蓄積、修正した教材を使った担任による指導を進める
- ・小小連携による合同学習での言語活動を実施する
- ・教職員研修を実施する

(2) 第5・6学年

○週3コマの英語科を実施

- ・モジュールについては平成28年度検討結果による
- ・前年度までに蓄積、修正した教材及び文部科学省の補助教材を使った担任による指導を行う
- ・小小連携による合同学習での言語活動を実施する
- ・評価方法について検証、修正する
- ・教職員研修を実施する

○モチベーション向上の取組を推進

- ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへ参加する
- ・ICTを活用した外国の児童との交流を実施する
- ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ英語学習への関心意欲を高める

2 中学校、高等学校

(1) 中学校

○小中高英語授業交流を実施

- ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を行う
- ・小学校英語教育担当教員との情報交換を行い、年間指導計画を検証、修正する
- 中学校英語教育の高度化を目指した指導改善の計画
 - ・英語による授業を完全実施する
 - ・小学校の英語教育を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を検証、修正する
 - ・高度化された中1スタートプログラムを実施、検証する
 - ・高度化に伴い追加して使用する教科書以外の副教材等による指導を含めた年間指導計画を策定する
- モチベーション向上の取組を推進
 - ・さくら小中学生英語スピーチコンテストへ参加する
 - ・ICTを活用した外国の生徒との交流を実施する
 - ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

(2) 高等学校

- 小中高英語授業交流を実施
 - ・中・高等学校の教員が小学校へ出かけて、外国語活動及び英語科の授業研究を行う
 - ・小学校英語教育担当教員との情報交換を行い、年間指導計画の検証、修正を行う
- 高度化した中学校の学習到達目標との連結
 - ・中学校修了時の英語力を踏まえた「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を検証、修正する
 - ・高1スタートプログラムを実施、検証する
- モチベーション向上の取組を推進
 - ・中・高等学校連携授業を実施する
 - ・ICTを活用した外国の生徒との交流を行う
 - ・米国リッチモンド市及び韓国慶尚北道清道郡との交流事業について授業で取上げ参加への意欲を高める

○平成 27 年度の進捗状況・課題

1 研究全体の進捗状況・課題

(1) 目標の設定及び評価の観点等

〈1〉小学校 中学年 外国語活動

①目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

②内容

- 1 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。

(1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り言葉の面白

さや豊かさに気付くこと。

(2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があ
ることに気付くこと。

(3) 異なる文化を持つ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深めること。

2 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。

(1) 言葉を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

(2) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。

(3) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。

〈2〉小学校 高学年 外国語

① 教科の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現を用いて話したり聞いたりするなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

② 英語の目標

(1) 身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにする。

(2) 身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考え等を話すことができるようにする。

(3) アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読もうとする態度を育てる。

(4) アルファベットを書くことに慣れ親しみ、英語を書こうとする態度を育てる。

③ 内容

(1) 言語活動

ア 聞くこと・話すこと（音声コミュニケーション）

- ・基本的な英語の音声に慣れ、身の回りの語彙や場面の中での表現を聞き取り、状況から判断して適切に応じること

- ・自分の考えや気持ちなどを、英語やジェスチャーを使って、聞き手が分かるように話すこと

イ 読むこと・書くこと（文字コミュニケーション）

- ・文字や符号を識別し、正しく読むこと

- ・単語や定型表現を識別すること

- ・文字を識別し、正しく書くこと

- ・単語や定型表現を識別し、正しく書き写すこと

〈3〉中学校 外国語

① 教科の目標

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。

② 英語の目標

(1) 身近な話題について話される英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。

- (2) 身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 身近な話題について書かれた英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 身近な話題について、英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

③内容

(1) 言語活動

ア 音声コミュニケーション

○やりとり

- ・身近な内容について、聞いたり読んだりしたことなどを話し合い、分かったことを確認したり、簡単な意見を伝え合ったりすること

○発表

- ・身の回りのことについて、聞き手を意識しながら英語で伝えること
- ・与えられた身近なテーマについて、自分の意見等の短いスピーチをすること

○聞くこと

- ・身近な事柄に関する簡単なメッセージを聞いて理解したり反応したりすること
- ・簡単なアナウンスからの情報を得ること
- ・身の回りの事に関する簡単な会話や説明の概要を理解すること

イ 文字コミュニケーション

○読むこと

- ・簡単で短い文章の要点を把握すること
- ・簡単で短い文章のあらすじを理解すること
- ・簡単で短い文章から必要な情報を読み取ること

○書くこと

- ・はがきや手紙で身近なことを短く簡単に伝えること
- ・身近な事柄について簡単に説明すること
- ・聞き取った内容についてメモを取ったり、意見や感想を簡単に書いたりすること

これらの目標等は、昨年度作成した小学校のものに中学校を追加し、一部修正したものである。高等学校についてはまだできていない。

これらを骨子として、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を作成することとした。

また、評価の観点については、小学校と中学校を接続しやすくするために、次のような考え方で観点を設定した。

現行の学習指導要領において、中学校外国語には4つの評価の観点があり、そのうち4技能の運用能力に係る観点として、「外国語表現の能力（話すこと・書くこと）」と「外国語理解の能力（聞くこと・読むこと）」とに区分されている。しかし、小学校では「話すこと（表現）」と「聞くこと（理解）」が学習の中心であることから、小・中学校の4技能の捉え方が異なっている。小学校では話すこと、聞くことがセットで、読むこと、書くことはスキルの定着を求めないというスタンスであるのに対し、中学校では、外国語表現の能力として話すことと書くことを一緒にし、外国語理解の能力として聞くことと読むことを一緒にの観点で括っている。

小学校	話すこと	聞くこと	書くこと	読むこと
中学校	外国語表現の能力		外国語理解の能力	
	話すこと	書くこと	聞くこと	読むこと

このため、小・中学校の学習を円滑につなげるために、次のような区分で観点を設定することとした。4技能はいずれも、基本的にコミュニケーションのためのものであるという前提のもと、4技能を「音声コミュニケーション」と「文字コミュニケーション」という範疇で区分した。小学校の中学年についてはこれまでの外国語活動の観点を継承している。

また、音声コミュニケーションについては、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定する際には、「話すこと」を「やりとり」と「発表」に分けて設定することとした。

小学校 中学年	主体的に学習に 取り組む態度	外国語への慣れ親しみ ----- 話すこと・聞くこと		言語や文化に関する 気付き
小学校 高学年	主体的にコミュニ ケーションを 図る態度	音声コミュニケーシ ョンの基礎的な能力 ----- 話すこと・聞くこと	文字コミュニケーシ ョンへの慣れ親しみ ----- 書くこと・読むこと	言語や文化につ いての体験的な 知識・理解
中学校 高等学校	主体的にコミュニ ケーションを 図る態度	音声コミュニケーシ ョンの能力 ----- 話すこと・聞くこと	文字コミュニケーシ ョンの能力 ----- 書くこと・読むこと	言語や文化につ いての知識・理解

小学校において新たに作成した通知表等は、既にこの新しい評価の観点の考え方で設定している。しかし、この観点設定の妥当性等については、十分検証できておらず、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定後の検証に合わせて、再度検討していくこととしている。

(2) 研究組織の活性化

本事業の研究組織については、「4. 研究組織」に示すとおりであるが、この組織について2つの課題があった。

①複数校の教職員での日常的な研究協議が行いにくく、運営指導委員会や研究会の前にならないと研究に取り組めないといった状況から、各研究部の主体的な活動が難しかった。

②ALT 研究部による学級担任を支援するための研究が、JET プログラムの ALT と民間の ALT が混在して研究にあたっているため、組織として活動することが難しかった。

今年度は、これらの課題のうち主として①について改善を図り、②については雲南市教育委員会とも協議しながら次年度以降改善していくこととした。

本研究地域では、島根県からの再委託を受けている雲南市教育委員会に外国語担当の指導主事等がないため、県の指導主事が直接支援や指導にあたっている状況がある。本来であれば、指導主事等が継続的に学校と直接協議しながら推進していくところであるが、県の指導主事がいる松江市や出雲市と研究地域（雲南市）が離れていることから、これまでは定期的な連絡・協議ができていない状況であった。

そこで今年度中途から、「定例会」を設け、各学校の管理職及び研究担当者、県の指導主事、雲南市の担当者が毎月集まって、研究の進捗状況や課題等について話し合う機会を設定した。特に協議しなければならない議題がなくても集まり、顔を合わせて状況等の確認を行ったり、現場で困っていることについて話し合ったりすることで、次のような効果があったと感じている。

- ・ 研究校と行政関係者の協力体制の向上
- ・ 取組の重点や課題の共有会と明確化
- ・ 研究担当者の主体的に研究に向かおうとする意欲の向上

(3) 教員研修の充実

特に小学校の教員にとっては、英語を指導するということに対する抵抗感や不安感があるので、教職員に対する様々な指導や支援を行っていく必要がある。

各研究校においては、次のような方法で研修を深め、その効果もあって、研究開始当初のような、小学校教員の英語指導に対するネガティブな姿勢はほとんどなくなった。

- ・各学校における主体的な研修（職員会等）
- ・英語コーディネータによる資料や情報等の提供
- ・他地域、他県等で実施された各種研修への参加とその伝達研修
- ・吉田中学校区の3校による主体的な授業研究の実施

また、吉田中学校が、島根県が受託している「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の研修協力校であることから、研究地域及びその周辺の小・中・高等学校の教員を対象とした研修を実施した。単に研究校だけで研修を行うのではなく、他校の教員に参加してもらうことで、研究校の取組成果を広め、周辺地域の学校の指導力向上に寄与することができた。

今年度の研修は日本英語検定協会の協力により、午前中に、文教大学教授による「小・中・高等学校をつなげる『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標の設定について」というテーマでの講演、午後はブリティッシュ・カウンシルによる英語指導に関するワークショップを行った。ブリティッシュ・カウンシルのワークショップについては、すべて英語で実施するため、小学校の先生方にとっては研修前の不安が大きかったようであるが、研修後のアンケートには、「楽しかった」「自分もできた」「これなら指導ができそう」といった前向きな感想が多く見られた。

2 研究部ごとの進捗状況・課題

(1) 授業研究部

①複式学級における単元配列の工夫 ～スパイラルな学習による定着を目指して～

小学校中学年及び高学年の単元配列については平成 26 年度に作成した計画を基に授業を行い、見直しを図りながら、別に添付する単元配列表を作成した。

研究校（小学校）は全学年が複式学級であり、一部の単元は2カ年にわたって繰り返し行っている。その際、下学年と上学年の学習活動に差を持たせるよう計画したが、実際には、2度目に学ぶ上学年は、特にそういった活動の差を設けなくても、高度な言語活動を行う傾向があることも分かった。

同じことをスパイラルに学ぶという考え方から、こうした学習方法は効果的であると考えている。単元を文構造による系統性で配列した場合、5年生の初めに学習する内容が6年生では出てこなかったり、6年生の終わりに学習する内容はスパイラルに取り扱おうと思ってもできなかったりといった状況が生じる。しかし、複式の単元配列の場合、2カ年にわたって繰り返し学習することが可能であり、これは複式学級ではない通常の学級での学習にも適用できることではないかと考えている。

仮に、これまでの年間 35 時間の外国語活動の各学年の単元数が、

第5学年：テキスト1：7単元×各5時間

第6学年：テキスト2：7単元×各5時間

とすれば、教科化になった70時間での単元構成は、次のいずれかになると考えられる。

ア) 1つの単元あたりの時数はこれまでと同程度で、各学年の単元数を増加する方法

第5学年：テキスト1：14単元×各5時間

第6学年：テキスト2：14単元×各5時間

この方法では、扱う文構造や語彙が多くなり、中学校の学習内容を前倒しすることにつながる恐れもある。

イ) 1つの単元あたりの時数を倍増し、年間の単元数は変えない方法

第5学年：テキスト1：7単元×各10時間

第6学年：テキスト2：7単元×各10時間

この方法では、扱う文構造等はこれまでと同程度のものであるが、それぞれの単元で言語活動等に費やす時間を増加したり、じっくり時間をかけて取り組んだりすることが可能である。

上記ア、イを比較した場合、小学校の学習としてはイの方が好ましいと考えられる。しかし、この方法では、途中で飽きることなく意欲的に取り組める言語活動を準備しなければならない難しさがあり、また第5学年の初めに学習した内容を第6学年の後半では忘れてしまう恐れもある。

島根県の研究校で行っている複式学級の指導の考え方を取り入れると、次のような単元構成が可能となる。

ウ) 同じ文構造を扱う異程度の学習を2カ年間繰り返す方法

第5学年：テキスト1：7単元×各5時間+テキスト2：7単元×各5時間

第6学年：テキスト1'：7単元×各5時間+テキスト2'：7単元×各5時間

※テキスト1'及び2'は、同じ文構造を扱った異程度の学習活動や言語活動を表す。

小学校においては、1つの単元を時間をかけてじっくり学習するより、2カ年にわたって繰り返した方が、定着には効果的であると考えられる。1年目に「漠然」と理解し、2年目に「明確」になり定着する。

このような2カ年にわたって繰り返す複式学級の単元構成の方が、より確実に定着するのではないかと考えている。

②文字を書いたり読んだりしようとする意欲を育てる言語活動の工夫改善

単元末のゴールとなる言語活動に、子供たちが文字を書いたり読んだりする必然性や必要感が生じるよう配慮し、自然な形で書いたり読んだりする活動に触れるよう単元の工夫を行った。以下は、1学期に高学年の授業で行った活動例である。

例1) What do you like?

自分の好きなものを集めてイングリッシュパスポートの自分のプロフィールページを作る。補助教材の「アルファベットジングル動物編」のイラストを使ってコミュニケーション活動を行う。

例2) How many PCs?

How many を使って学校クイズを作り、紹介し合う。学校の中にあるものの数を問うクイズを How many を使って作り、校内掲示用のポスターを作る。

例3) I can swim.

からくりカードを使って、Who am I?クイズを作る。「できること」「できないこと」

を尋ねたり答えたりし、人それぞれに違いがあることを知る。その後、補助教材「This is me!」を読む。

例4) When is your birthday?

インタビューをして誕生日カレンダーを作る。英語での月の言い方を知り、自分が選んだ月の英語をカレンダーに書く。ワークシートを使ってアルファベットを読んだり書いたりする。

③学級担任が自信を持って取り組むために

～単元計画と授業の流れのパターン化・他教科等との関連・英語コーディネータの関わりを通して～

学級担任が自信を持って授業づくりに取り組むことができるよう、外国語の授業展開をパターン化した。異学年と一緒に学習する複式学級においては、担任の深い児童理解が必要である。英語の指導に意識がいくあまり、児童の実態を見失ったり、適切な支援ができなくなったりするのを防ぐためにも、学級担任が自信を持って指導にあたるようにすることが重要である。

そのために、次のような授業展開のパターン化を行った。

- 1 ウォームアップ
- 2 デモンストレーション
- 3 アクティビティ
- 4 今日のゴール
- 5 ふりかえり

これにより学級担任が英語指導に対する抵抗感が少なくなったのと同時に、児童も見通しを持って学習に取り組めるようになった。

単元末に児童相互の新たな発見や気づきを促す相手意識のあるコミュニケーション活動を設定するのは、学級担任にとっては決して容易ではない。その都度新たな言語活動を設定することも重要だが、他教科と関連させたり、コミュニケーション活動の相手に、学級の児童だけではなく教員や他校の児童生徒を加えたりすることで、相手意識のある活動を設定しやすくなる。

このように、単元の流れもある程度固定化することで、学級担任は取り組みやすくなる。こうした工夫を行うのは英語コーディネータであるが、学級担任との十分な打合せを行いながら進めてきたことで、昨年度までは英語に苦手意識があった先生方もそのことを口にすることがなくなり、今ではすべての先生方が、自ら授業を改善していこうとする意欲に満ちている。

また、評価に関して英語コーディネータが中心に行い、評価言を書く視点とそれに対する各児童の実態や記録を学級担任に提供することで、「英語は分からないから評価できない」といった状況も生じていない。

④中学校、高等学校における取組

中学校では、主として、授業における言語活動の充実と後述する「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標の設定に取り組んだ。その中で、昨年度本事業での英語学習を小学校で経験

した中学1年生の状況を、次のように捉えている。

- ア) 中学1年生は、他の学年と比較して、「英語が好き」「文字を書くのが楽しい」と感じている生徒が多い。
- イ) 英語の文構造を意識する生徒が多く、文構造への気付きに対して敏感である。例えば「 dont」と発音していた言葉が「don't」であり「do not」の短縮形であることに触れたときの生徒の反応は、小学校で学んだ知識や経験とつながったことへの感動が表出されていた。

高等学校では、まだ指導計画の改編等を行えていない。中学校と同じように言語活動の充実を図っているところであるが、高校卒業後の進路や学習コースの多様さ、加えて生徒の英語力の定着の度合いやモチベーションの差などの課題があり、研究を進める方向性を模索している状況である。

⑤ 「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の設定

当初の予定では、小中高地域連携部で「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定する計画にしていたが、これは授業計画に直接関連することから、授業研究部が担当することとした。

作成にあたっては、特に、各「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標と単元指導計画がリンクするよう配慮した。



この図は、年間指導計画と「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標、単元計画の関係を示したものである。（評価の観点等は現行の学習指導要領による）

作成した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標が「絵に描いた餅」にならないためには、それぞれの CAN-DO ステートメントが、どの単元のねらいとつながっているかを明確にしておく必要がある。そのため、島根県では、中学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を設定する際は、使用教科書の単元計画からボトムアップ式で作成する方法をガイドブックで示している。（「中学校外国語「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標作成ガイド」を資料に添付）

この方法で作成すると、単元と「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は必ずつながるが、一方で、できあがった学習到達目標の系統性について、ばらつきが出てしまう恐れがある。

そこで、今回の作成にあたっては、東京外国語大学の投野由紀夫教授らによる「CEFR-J」の能力記述文をよりどころにして、修正作業を行った。

まず小学校から作り始め、その後、高校卒業時のゴールを設定し、2つをつなぎ合わせていくイメージで作成しようと考えた。

小学校では、それぞれの単元に話すことと聞くことが一体的に含まれることから、中学校の単元でやっているような「ねらいとする技能の焦点化」は行わず、1つの単元から話すこと、聞くことの2つの学習到達目標につなげる方法を取った。

全体として目指す英語力の妥当性を見極めるために、「CEFR-J」を使っている。小学校3・4年生では慣れ親しみをねらいとしていることから、学習到達目標の設定はせず、小学校5・6年生から始めている。各段階の目指す英語力を次のように設定した。高校卒業時の目標は、B1レベル（英検2級程度）に設定している。

小学校5年生	PreA1
小学校6年生	A1.1
中学校1年生	A1.2
中学校2年生	A1.3
中学校3年生	A2.1
高校1年生	A2.2
高校2年生	B1.1
高校3年生	B1.2

小学校における書くこと、読むことについては、「書いたり読んだりしようとする態度を育成する」ことが主たるねらいであり、スキルを定着することを重要視しないことから、中学校のような能力記述文は設けないものの、アルファベットを書くこと、読むことだけは、定着させたいスキルとして能力記述文を設けている。

高等学校の「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は、まだ完全に単元と目標とする技能のリンクができていない状況である。高等学校については、教科書の単元が中学校に比べ分量が多く、1つの単元に1つの技能目標を設定しにくいので、単元とのリンクを明確にすることが容易ではない。また、高等学校では、生徒の科目選択や進路希望の違いから、全員が到達すべき目標の設定に苦労しており、今後の大きな研究課題といえる。

作成した「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標は別に添付する。

次年度は、高等学校の内容を検討するとともに、ベンチマークとなるパフォーマンスを収集しながら妥当性を検証していく。

(2) 教材研究部

教材研究部では、主として、ふるさと雲南を素材にし、将来自分の生まれ育った地域のすばらしさ等について英語で発信できる力を付けることを目的とした、小・中学校で継続的に活用する地域素材教材の開発に取り組んでいる。教材作成にあたっては、地域の伝統や文化、歴史と関連させて、地域の良さを発信する英語による言語活動を設定できるよう配慮する。

平成27年度末には製本が完成するよう作業を進めており、現段階での原稿を別に添付する。地域素材教材は、次の9つのカテゴリで構成している。

- 1：雲南の自然
- 2：雲南の特産
- 3：雲南の名所旧跡
- 4：雲南の遊び
- 5：雲南の祭り
- 6：雲南の伝統
- 7：雲南の伝承
- 8：雲南の歴史
- 9：雲南の暮らし

これらのカテゴリーごとに単元化し、紙面には主として写真や資料を配置する。「英語を学習させるための教材」というよりは、「雲南市の資料を英語学習に活用する」という内容で、巻末には中学生向けの英語の読み物教材を配置するものの、1つの文構造にねらいを絞った単元や、文構造・語彙の学習のページはない。教員や児童生徒が自由な発想で活用できる教材を目指している。

ふるさとの話題を取上げ、英語学習を通して地域に対する愛着や誇りを育てるとともに、その気持ちをグローバルな視点で発信していこうとする心情や態度を育てたいと考えている。

素材の収集にあたっては、雲南市の教育委員会や観光振興課等の協力を得ながら、過去に作成された学習教材や観光用資料を活用するなどした。

完成した教材については、次年度以降、各単元を活用した学習活動を具体的に考案し、単元配列とリンクさせていくこととしている。同時に、これらの単元を社会科の学習や総合的な学習の時間などの他教科等ともリンクできる内容にしていく計画である。

教材作成は、教材研究部の複数の教員で行っているが、英語学習の具体的な授業イメージがない教員もいるため、この単元がどのような形で活用できるかを想定しながら資料を収集することが難しかった。また、中学校向けの読み物教材については、出てくる英語の表現や難易度が妥当なものであるか、判断が難しい面もあった。

本研究地域は、学校と地域とのつながりが強く、また小規模校で様々な学習活動が工夫できることもあって、この教材の活用については様々な可能性があるかと捉えている。今後、その具体について協議等を行っていく予定である。

(3) 小中高地域連携部

小中高地域連携部では、小・中・高等学校の組織的な関わりや地域との連携を深めていくために、次のような取組を行った。

①本研究について地域への情報発信

研究校での取組を、広く保護者や地域に知らせ、地域で一体的に研究の気運を盛り上げていくことをねらいとして、学校便りに「英語教育のコーナー」を設け発信した。研究校である中学校では英語教員が一人であることから、英語の研究を学校全体で行っていくことが小学校に比べ難しく、他教科の教員に対して研究内容を知ってもらい、組織としての研究に少しでも向かえるよう配慮した。

以下は、中学校で発行された学校便りの「英語教育コーナー」である。

英語教育
コーナー

流ちょうな英語で
聴衆を魅了!

平成27年度島根県中学校英語弁論大会で3年生[]さんが3位に入賞しました。

「Ask what we can do 私たちにできることを考えよう」という主題で、ふるさと吉田町の人口減少の問題について、中学生にできることは何かということについて発表しました。

5分間近くの弁論原稿を正確に覚え、流ちょうな英語で発表して聴衆を魅了しました。この大会は高円宮杯第67回全日本中学校英語弁論大会の予選を兼ねており、11月25日から27日まで東京で開催される中央大会に出場することになりました。(高田)

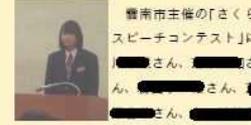


英語教育
コーナー

英語で伝える
ふるさとへの思い



さくらスピーチコンテスト



豊南市主催の「さくらスピーチコンテスト」に[]さん、[]さん、[]さんが参加しました。ふるさと吉田町をそれぞれの視点で紹介するスピーチを行い、[]さんが第3位に入賞しました。

サンタクララ市長杯
中学生英語スピーチコンテスト

昨年に引き続き、今年度も「サンタクララ市長杯中学生英語スピーチ大会」に[]さんが参加しました。「Beyond what you are now〜ありのままの自分を越えて〜」というタイトルで部活動を通して学んだことを流ちょうな英語でスピーチしました。

出雲北陵高校
英語シミュレーションコンテスト
[]さん、[]さん、[]さんの3名が参加しました。課題文を暗読

し、発音や抑揚だけでなく、どのように伝えるのかを意識しながら大勢の人たちの前で堂々と発表することができました。



シャンティ来校

シャンティ・アフガニスタン事務所からワビド・アマッド・ザマニさんが来校され、3年生が日本文化(神楽・書道・茶道)のワークショップを英語で行いました。神楽の衣装を着て写真を撮ったり、ワビドさんの名前を漢字で書いてプレゼントしたり、お名前を披露したりと、こころ道まる「おもてなし」ができました。(高田)

英語教育
コーナー

高円宮杯英語弁論大会で
堂々と発表しました

11月26日(木)に[]さんが島根県代表の1人として、東京で開かれた高円宮杯全国英語弁論大会に出場しました。残念ながら決勝大会に進むことはできませんでしたが、高いレベルの大会で英語を学び、視野を広げました。(高田)

『貴重な体験となった英語弁論』
3年 []

東京へ大会に行って、驚くことばかりでした。英語で会話をしている中学生

や、同級生とは思えないくらいの高いレベルのスピーチの発表など、これまで見たことがない、聞いたことがないものばかりでした。でも、これらのことは、私にとっても良い刺激になったし、自分の世界が広がったような気がしました。このような貴重な体験ができたのは、指導してくださった先生方のおかげです。本当にありがとうございました。



②各種英語教育関連のイベントや大会への参加の推進

小中高地域連携部として特別にイベントや大会を設定することはしていないが、小学校から高等学校まで、児童生徒が学んだ力を活用したり、達成感や自己成長を感じたりする機会として、各種英語関連の行事への積極的な参加を呼びかけている。

上にあげた学校便りにも紹介されているように、小・中学生は様々な英語スピーチコンテスト等に参加し、優れた成績を収めている。吉田中学校は全校生徒30名ほどの小規模校でありながら、平成27年度は、高円宮杯英語弁論大会全国大会出場をはじめ、地域や県内のコンテストで複数の生徒が上位入賞した。

③他の研究部等への支援

小中高地域連携部は、英語学習のモチベーション向上のための環境整備や国際交流事業の推進等の役割に加え、他の研究部の支援も行っている。小学校で「アルファベットカード」の作成が必要になったとき、小中高地域連携部がこの仕事を支援し、小・中・高等学校の英語教育に関わる教員の考えや意見を聴取し、カードに使う文字の大きさやフォント、色などを研究しながら、すべての小・中学校で共通して使えるアルファベットカードを作成した。

(6) 評価計画

○第一年次～第四年次、校種別

<第1年次（平成26年度実施済）>

- (1) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
- (2) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況

<第2年次（平成27年度）>

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・ 質問項目の検討、策定
 - ・ 1学期末及び3学期末に実施
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・ 各学期実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・ 2回の運営指導委員会で協議
 - ・ 実地調査時に評価等を実施
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・ 小学校第3学年～中学校第3学年までを対象に年間2回実施
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・ 参加状況の記録及び映像資料作成

<第3年次（平成28年度）>

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・ 1学期末及び3学期末に実施
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・ 各学期実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・ 2回の運営指導委員会で協議
 - ・ 実地調査時に評価等を実施
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・ 小学校第3学年～中学校第3学年までを対象に年間2回実施
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・ 参加状況の記録及び映像資料作成
- (6) 中学校における島根県学力調査の結果分析
 - ・ 中1及び中2の状況について把握・分析

< 第4年次（平成29年度） >

- (1) 児童生徒への意識調査の定量的分析
 - ・ 1学期末及び3学期末に実施
- (2) 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
 - ・ 各学期実施
- (3) 運営指導委員による評価
 - ・ 2回の運営指導委員会で協議
 - ・ 実地調査時に評価等を実施
- (4) 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
 - ・ 小学校第3学年～中学校第3学年までを対象に年間2回実施
- (5) スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況
 - ・ 参加状況の記録及び映像資料作成
- (6) 中学校における島根県学力調査の結果分析
 - ・ 中1～中3の状況について把握・分析

○平成27年度の進捗状況・課題

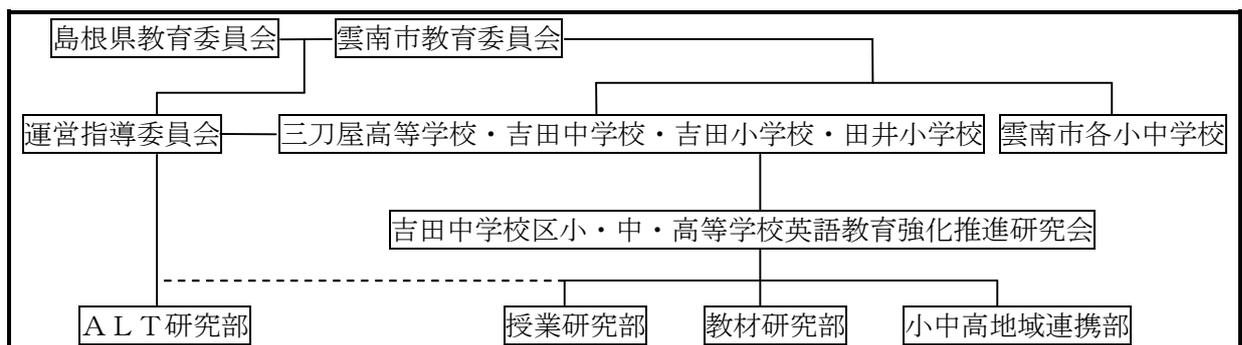
現在、年度末の検証に向けて、各種データの収集と分析を行っている。

- ・ 児童生徒への意識調査
- ・ 学校評価の活用による指導者、保護者、地域の意識等の把握
- ・ 運営指導委員による評価
- ・ 児童英検学校版、英語検定等の外部検定試験を活用した児童生徒の英語力の状況
- ・ スピーチコンテスト、国際交流事業等への参加状況

現段階では、まとまったデータが集計できていないため、事業報告書で提示する。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

○活動計画

有識者の意見等により研究の方向性を修正したり、学校だけでは解決できない課題への対応方法等について意見を収集したりする目的で、年間2回の運営指導委員会を計画する。

専門分野での知識を研究校の研究に生かし、論理的な裏付けや先行事例を得ることにより、研究を

より確かなものとしていくために、カリキュラム、指導方法、評価を得意分野とする3名の大学教授及び准教授を委嘱する。小学校においてはALTとの連携が課題となるため、ALT経験のある大学准教授及び県教育委員会のPrefectural Adviserもメンバーに加えた。また、現場での具体的な指導助言ができる各校種の教諭・指導主事にも委員を依頼することとした。高等学校については、雲南市にあるもう一つの高等学校である大東高等学校から教頭（英語科）を運営指導委員に加え、地域の中・高等学校の連携を一層推進するとともに、研究拠点の研究成果がより広く普及することができるよう配慮した。

平成26年度に委員の委嘱が遅れたことや、1回しか開催できなかったことを反省し、有識者の意見をより研究に反映させ、研究校の教員を支援できる体制を作るため、次のように活動を計画する。

○年間2回の運営指導委員会を開催する

- ・年間2回の運営指導委員会を行い、1回目は計画と進捗状況に対する指導助言、2回目は研究成果についての指導助言を得ることとする。

○運営指導委員と各学校の研究担当者とのネットワークを作る

- ・運営指導委員会は年間2回程度の計画であるため、日常的に情報交換したり意見を伺ったりすることが困難であるため、メールやウェブサイト等を活用し、直接意見を収集できる体制を整備する。特に広島大学の築道教授については、県外からの参加となるため、ICTを活用したネットワークを整備する。

○研究校における研修会等へ案内し、必要に応じ指導を得る

- ・必要に応じて研修会にも参加を依頼し、指導助言を得る。実地調査が行われる際は、運営指導委員も参加することとする。

○平成27年度の進捗状況・課題

今年度は、昨年度の反省を踏まえ、2回の運営指導委員会を実施した。（第2回は2月実施予定）第1回運営指導委員会は、次のような内容で開催した。

- ・研究の概要及び進捗状況の説明
- ・小学校における研究授業及び研究協議
- ・研究の内容等についての意見交換、指導助言

各運営指導委員からは、それぞれの専門的な見地から意見や助言をいただき、その後の研究の充実に寄与したと考えている。

2月に行う第2回運営指導委員会では、授業研究を行うとともに、研究部ごとの分科会を開催し、それぞれの取組を詳細に報告して、指導助言を得る予定である。

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	(3月30日:) 各校管理職打合せ 27日: 吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会(全体会・部会) 27日: 文部科学省事業説明会	
5月	12日: 吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会(部長会) 25日: 英語教育強化推進研究会(文部科学省事業説明会報告・部長会)	運営指導委員委嘱

6月	<p>5日：松阪市議員団訪問（市役所：取組概要説明）</p> <p>9日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（連絡会）</p> <p>17日：吉田中学校英語授業に小学校旧担任参加</p> <p>23日：中学校英語研究会（授業公開・研究協議）</p>	
7月	<p>2日3日：公開授業（吉田小・田井小・吉田中：北海道寿都町からの視察）</p> <p>8日：授業研究会（田井小：訪問指導）</p> <p>14日：児童英検（吉田小）</p> <p>16日：児童英検（田井小）</p> <p>第1回英語アンケート</p> <p>29～31日：グローバル化に対応した外国語教育研修（浜田教育センター）</p>	
8月	<p>3日：吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（正副会長会、部会・部長会）</p> <p>5日：出雲市教育研究会外国語活動部会研修（吉田小教頭講師）</p> <p>5～7日：グローバル化に対応した外国語教育研修（島根県教育センター）</p> <p>10日：授業研究部会</p> <p>25日：雲南市英語部夏期研修会兼教職員研修会</p> <p>25日：授業研究部会・教材研究部会</p>	
9月	<p>17日：小・中・高英語教育担当者会（三刀屋高校：授業参観）</p> <p>25日：授業研究会（吉田小）・授業研究部会</p>	
10月	<p>1日：島根県中学校英語弁論大会（3位入賞）</p> <p>6日：小中高地域連携部会</p> <p>14日：雲南市教育委員訪問（吉田中：授業公開・取組概要説明）</p> <p>16日：授業研究会（田井小：学習と評価成果発表会）</p> <p>16日：定例会</p> <p>18日：さくら小中学生英語スピーチコンテスト（小学生5名、中学生5名出場：小学生1位、中学生3位入賞）</p> <p>19日：雲南市教育委員訪問（吉田小：5・6年授業公開）</p> <p>22日：外国語活動合同授業（吉田小、田井小3・4年）</p> <p>30日：英語開発フォーラム（琉球大学）</p>	27日：第1回運営指導委員会
11月	<p>1日：サンタクララ市長杯英語スピーチコンテスト（1名出場）</p> <p>7日8日：雲南市教育フェスタ</p> <p>8日：出雲北陵高等学校英語レシテーションコンテスト（3名出場）</p> <p>11日：定例会</p> <p>17日：小中高地域連携部会</p> <p>26日：高円宮杯第67回全日本中学校英語弁論大会（1名県代表として出場）</p>	

	26日 27日：第1回先進校視察（岐阜県大垣市星和中・中川小）	
12月	2日：雲南市教育研究会英語部会（取組概要説明） 24日：定例会 第2回英語アンケート	
1月	6日：外部専門機関と連携した英語指導力向上事業に係る英語教育研修会（吉田中） 13日：小中高地域連携部会 21日：全国連絡協議会 22日：英語検定（第1回） 22日：教材研究部会 29日：授業研究部会 26日：雲南市英語コンテスト 定例会（日程未定） 児童英検（第2回）予定	
2月	1日：公開授業（吉田小・田井小：長崎大学からの視察） 10日：小中合同授業（吉田小・田井小・吉田中） 15日 16日：第2回先進校視察（石川県七尾市立御祓中・小丸山小） 定例会（日程未定）	4日：第2回運営指導委員会
3月	吉田中学校区小・中・高英語教育強化推進研究会（部会） 定例会（日程未定）	
【その他の取組】		